

全学プロジェクト事業（学長提案事業）決算（実績）報告

申請年度	2017年度		
基本方針	アクティブ・ラーニング		
事業名称	初年次教育としての企業連携型PBL授業の展開		
担当部局・部会等の体制	国際関係学部		
担当責任者	新里孝一（国際関係学部長）		
事業担当者	新里孝一（国際関係学部国際関係学科教授）		
実施期間	2017年4月～2017年7月 新規 ・ 継続		
予算執行担当事務室	国際関係学部事務室	連絡先（内線）	内線 6860
事業の実績	<p>※別紙のとおり <input type="checkbox"/>（別紙を用いる場合はチェックを入れる）</p> <p>本事業は（株）ベネッセ i-キャリア・FSP が開発したプログラムを基礎に、前半を Project A、後半を Project B とし、AB とともに、4～5 名のグループで、企業の提示する「課題（ミッション）」の解決に取り組み、企業への提案を行い、企業からのフィードバックを得ることが柱となる。講師は、昨年度の埼玉県のパログラムと同様、ベネッセ派遣講師の細田映江先生。</p> <p>初年次の前期に、半ば強制的にこうした課題に取り組みさせることで、大学での学びへの意欲を喚起すると同時に、何のために何をどう学ばよいか（学びの方向づけと計画）を考えさせる重要な機会とすることが主たる狙いである。</p> <p>4月5日に1年生全員を対象に説明会を実施し、参加者を募った。「授業以外でも多くの時間をミーティングに割かなければならない」等、PBL型授業への取り組み方を強調しすぎたせいか、参加者は17名（男子3名・女子14名）にとどまった。一人の脱落者もなく、全員が二つの Project をやりきることができた。出席率は99.7%。</p> <p>14回の授業は次頁の計画に沿って行われた。Project A 及び Project B の概要について記載する。なお、詳細な報告は、後述の通り、国際関係学部 HP に掲載済みである。</p> <p>Project A</p> <p>4月28日、Project A の課題出しが行われた。課題出し担当は、株式会社アートエンディングスの西本淳弥代表取締役。</p> <p>会社概要、事業内容の説明の後に、次のような課題が提示された。</p> <p>あなたは、アートエンディングの社長直轄の経営企画室に配属されました。経営企画室は、アートエンディングの新たな事業を検討するミッションを背負っています。アートエンディングのこれまでのビジネスを理解したうえで、越谷市で「ご利用者」と「ご家族」に安心を提供する新しい事業モデルを社長に提案せよ。</p> <p>課題には、3つの条件が付されています。すなわち、事業の対象は、看取りを希望している本人、家族。地域包括ケアシステム、医療保険と介護保険を理解すること。予算上限は1000万円。</p>		

	日付	内容	企業参加
1	4月14日	マインド・セット及びルール説明	
2	4月21日	課題解決とは？ ディスカッション練習	
3	4月28日	企業からの課題提示	○
4	5月12日	中間報告（企業による講評・指導）	○
5	5月19日	課題解決のためのグループワーク（1）	
6	5月26日	課題解決のためのグループワーク（2）	
7	6月2日	課題解決案のプレゼンテーション（最終報告）	○
8	6月9日	チーム再編、セッション2へのチーム計画	
9	6月16日	企業からの課題提示	○
10	6月23日	課題解決のためのグループワーク	
11	6月30日	中間報告（企業による講評・指導）	○
12	7月7日	課題解決のためのグループワーク	
13	7月14日	課題解決案のプレゼンテーション（最終報告）	○
14	7月21日	全体の振り返り、今後の学びの検討	

5月12日には第一次提案が行われた。「今のままでは、四案とも事業化できない」、最終提案までに「事業を継続させるための戦略、競合他社の成功事例を調べあげること、損益分岐点をしっかり捉えること」という西本社長からの指示をうけ、2週間の調査を経て6月2日の最終提案に臨んだ。

6月9日には、Project Aのチームを解散し、Project Bのための新チームを編成した。

Project B

Mission（課題）を提示するのは、株式会社KSPさいたま支社の石井利典支社長。石井支社長は、警備会社が直面しているのは「黒字倒産の危機」であり、こうした危機を乗り越えるにはどうすればよいのかと、次のような課題を提示した。

みなさんは、KSP人事課のメンバーです。半年後、100名規模の人員が必要となる案件を受注しました。この案件をスムーズに実行するために、100名の採用を可能にする

	<p>「採用戦略」を検討しなさい。</p> <p>課題には3つの条件が付された。(1)採用のための予算は1月20万円。(2)現状の所属人数は60名スタートとする。(3)単なる頭数ではなく、KSPとして信頼して顧客に提供できる人材の採用・育成の観点も考慮すること。さらに、検討・提案にあたっては、警備業務や警備業法をきちんと調べること。</p> <p>第一次提案は6月20日に行われた。石井支社長の講評は次の通り。「とにかく発想が狭すぎる！自分の周囲だけに目を向け、大学生の視点だけで考えていたのでは、斬新な発想には繋がらない」「『たぶん』『おそらく』は厳禁。最終提案では、しっかりとした数字の根拠のある提案を！」。</p> <p>7月14日に実施された最終提案には、埼玉中小企業家同友会事務局のほか、加盟する2名の経営者も参観に訪れた。</p>
<p>事業に係る具体的な成果</p> <p>※申請書に記述した「事業の目的と効果」と対応させて記入すること</p>	<p>事業の成果①（学生のキャリア意識や学びの意欲の向上）</p> <p>PBLにより、学生のキャリア意識、学びの意欲や方向性（計画性）等の面に向上・改善の傾向が確認でき、この授業に参加した学生たちが、チュートリアルや授業中のグループワーク、演習等において「Active Learning」を牽引する学生リーダーとして活躍することが期待される。</p> <p>たくさんの「リアクションシート」や「メンバー評価シート」、「Project振り返りシート」には、何よりも「チームワーク」をめぐるさまざまな思いが綴られている。そこには、高校時代までは個人プレーを基本に生きてきた学生たちが、チームで考え、チームで行動せざるを得ない環境に置かれ、悩んだり迷ったりした経験が浮き彫りになっている。その一端を記す。</p> <ul style="list-style-type: none"> ◆自分が努力するのは当然だが、その努力を他のメンバーに感じさせることを忘れてはいけない。 ◆リーダーとしてメンバーのよさを引き出しながら話し合いをすることの難しさを痛感した。 ◆自分の考えをチームメンバーに説明する力のなさを感じた。 ◆メンバーの一人一人に刺激をうけ、協力することの大切さと、何より一生懸命に頑張ることの重要さに気づいた。今日の発表で、発表しているみんなの顔を見ながら、みんなとてもいい顔になった！と感じました。 ◆仕事を分担すれば何とかかなと思っていたが、分担してもいつも仕事が集中する人とそうでない人の差ができてしまった。グループワークの難しさを感じた。 ◆他人の意見を「違う」と思っても、うまく表現できず、黙っていることが多かった。 ◆他人になかなか頼むことができず、自分で抱えこんでしまうことが多かった。 ◆チームでたくさん悩み、ギリギリまで話し合い、予想以上に困難だったけど、自分が成長できた気がする。 ◆分担して調べたことを、全員で共有することが大事だと感じた。 ◆それぞれ感じ方や考え方が異なる中で、意見を出し合うことで自分にはない案が生まれてくるということをこの授業を通して実感した。 <p>なお、参加した学生たちの後期以後の学修行動に関するアセスメントを行う予定やフォローアップ企画はない。しかし、17名という少人数であるため、「問題解決学入門・まとめ」（個人シート）をもとに、所属するチュートリアルの担当教員の観察や、本事業担当者による学生との定期的な面談等により、本事業の中長期的な学修成果を確認していきたいと考えている。</p> <p>事業の成果②（他学部、そして全学への波及）</p> <p>外部講師によるPBL授業の展開方法を、他学部の教員に参観してもらうことはできなかった。しかし、次年度以後、他学部でPBL授業を実施するための参考事例としてもらうために、随時、詳細な授業レポートを学部HPに掲載し、情報発信を行った。昨年度に実施した「大学生のための埼玉企業魅力発見事業」のレポート（成果報告）を合わせて活用されることを期待したい。</p>

事業の成果③（企業との連携による学内インターンシップ）

教学改革等でも「外部評価体制の構築」が指摘されており、その観点からも、企業との連携・協働による授業運営の意義及び波及効果は小さくないと思われる。

本事業の運営にあたっては、2016年度の実績をもとに、本事業の趣旨に賛同された埼玉中小企業家同友会の全面的な支援を得ることができた。とりわけ、PBL型の授業を実施する上でもっとも困難だといわれる課題出し企業の選定（推薦）は、同友会事務局に任せることができた。

また、第一次提案や最終提案の際には、埼玉同友会事務局をはじめ、全国中小企業家同友会全国協議会事務局も参加し、学生を激励していただいた。そればかりか、県内の企業の経営者の方々も参観し、学生の提案に対するさまざまなアドバイスをを行っている。

2年間の取組を通じて、企業との連携による学内インターンシップの素地をつくることのできたのではないかと考える。

注1：一覧に挙げた成果物の現物・データなどを提出すること

注2：発行予定の成果物については発行時期を明記のこと

データ・Web ページ類

1 『チーム振り返りシート』（Project A）＝PDF

2 『チーム振り返りシート』（Project B）＝PDF

3 『問題解決学入門・まとめ』（個人カード）＝PDF

4 学部 HP に掲載された授業レポート

全学プロジェクト事業・「問題解決学入門」報告（1）

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_22433.html

全学プロジェクト事業・「問題解決学入門」報告（2）

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_22760.html

全学プロジェクト事業・「問題解決学入門」報告（3）

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_22893.html

全学プロジェクト事業・「問題解決学入門」報告（4・完）

http://www.daito.ac.jp/education/international_relations/news/details_23079.html

事業に係る
成果物一覧

※事業実施に伴う資料や成果物（報告書・レジュメ・資料・掲示物・実施状況がわかるWeb ページなど）

以下では、提出するデータ類に関して若干の説明をしておきたい。

授業外の学修時間

『チーム振り返りシート』には「講座時間外での合計ミーティング回数と時間」という項目がある。チームワークの成果を測定する有益な指標であろう。

Project A

チーム名	回数	時間
T-MEEEEEN	18	54
T-フルーツバスケット	12	35
T-ワン!!!	10	5.5
T-KKT	6	9

Project B

チーム名	回数	時間
T-ボスカトーレ	20	26
T-Differ	9	3
T-肉まん	20	50
T-Right	6	20

Project A の最優秀は「Tーワン!!!」。Project B の最優秀は「Tーボスカトーレ」。すでに一回の問題解決を体験した Project B の方に注目すると、回数・時間とも優秀賞と第二位のチームが群を抜いているのがわかる。20 回も集まり 20 時間以上ものミーティングを行えたチームと、そうでないチームとの違いは何か？ そこには「よいチームワーク」を作り上げるための一つのヒントが潜んでいるのに違いない。

到達度評価

「問題解決学入門」の 3 ヶ月の成果（到達度）を、学生次の 6 つの観点から振り返った。

1. この講座をうけて身についた（成長した）と思う点
2. プロジェクト活動で苦労した点は何ですか？（チームでの課題解決）
3. プロジェクト活動を通じて気がついた自分の強み（能力・性格）と興味の方向性は？
4. プロジェクト活動を通じて感じた自分には足りないと思う点（能力・性格など）
5. 社会人として活躍するため、卒業までに身につけたいことは（自分に足りない能力や知識を補い、新たに気づいた強みを伸ばしていくためにどんな取り組みをするか）
6. 上記 5 を達成するための今後の活動計画（学内・学外すべての活動が対象、授業履修計画も含む）

1 と 3 と 4 の観点に関する若干の意見を紹介しておく。

1. この講座をうけて身についた（成長した）と思う点

- ◆主張するときの根拠を構成する仕方。
- ◆人前で発表することによりあまり抵抗を感じなくなった。
- ◆人前で話すときは声が震えたり早口になっていたが、顔を上げてゆっくり話せるようになった。
- ◆考え方が大人になった気がする。
- ◆パワーポイントが使いこなせるようになった。
- ◆まったく性格の違う人と普通に話し合えるようになった。
- ◆共通の課題に向かって議論することは、本当に楽しかった。
- ◆他人の意見を聞いて全体を整理する能力。
- ◆自分から発言できるようになった。

3. プロジェクト活動を通じて気がついた自分の強み（能力・性格）と興味の方向性は？

- ◆ポジティブな性格。
- ◆話し合いを客観的に見ることができる。
- ◆他人の意見を発展させたり、改善案を考えるときに楽しさを感じた。
- ◆自分は人前で話すことが好きだということに気づいた。発表は緊張するけど、それ以上に楽しく面白い！
- ◆やると決めたらの行動力。
- ◆企画をするのが好きという気持ちが増大。
- ◆引っ張られるよりは、引っ張っていくほうが楽しいと感じた。
- ◆話し合いが好きだということ。

4. プロジェクト活動を通じて感じた自分には足りないと思う点（能力・性格など）

- ◆思っていることをみんなに的確に伝えるコミュニケーション能力。
- ◆課題を考えるための知識が圧倒的に足りない。
- ◆柔軟な思考力。
- ◆他人の意見にすぐに賛同してしまう癖。
- ◆何でも一人でやっけてしまい、まわりの人に頼れないところ。
- ◆数字。
- ◆会話を続ける能力が足りない。
- ◆粘り強さ。

		◆ I Tの知識と技術。		
①今後事業展開に関する意見。②全学プロジェクトへの要望		<p>①今後の事業展開に関する意見 2018年度以後も、埼玉中小企業家同友会の協力を得ながら、初年次前期に「問題解決学入門」を継続して実施していきたい。2年間の実績を活用しながら、学部の専任教員が担当し、受講者を30名程度まで増やしたい。また「入門」既習者を対象としたより発展的な「問題解決学」を整備していきたい。</p> <p>②プロジェクトへの要望</p> <ul style="list-style-type: none"> プロジェクトの成果を、学内外に発信する体制を整備してもらいたい。 全学プロジェクトの諸事業で、これまで以上に「教職協働」を推進してもらいたい。 ALのための教室環境の充実を図ってもらいたい。AV機器類ではなく、机と椅子をAL(PBL等のグループワーク)に適した、軽く動かしやすいものにしてもらいたい。さらに、壁面ホワイトボードも便利なツールだと思うので検討してもらいたい。 		
予算科目別収支決算書	予算科目	予算額(円)	執行額(円)	内訳
	教)支払手数料	1,359,000	1,346,237	講師派遣・運営委託費、テキスト代
	教)支払報酬支出	90,000	90,000	課題提供企業への講師派遣経費
合計(円)		1,449,000	1,436,237	
備考				
委員会処理欄	受付日	/ /		
	全学プロジェクト外予算委員会コメント			

全学予算編成会議		
----------	--	--